

オプション検査は、健康保険組合として特に推奨しているものではありませんが、ご希望の方は任意でお申し込みいただけます。

腫瘍マーカー検査

がん細胞やがんの影響を受けた正常細胞が放出する物質を血液で測定する検査です。

【分かること】

- がんの可能性を知る補助情報
- 治療効果の確認、術後の再発チェック

【主な項目】

CEA：大腸・胃・肺など
CA19-9：膵臓・胆道系
AFP：肝臓
PSA：前立腺（男性）

【必要性が考えられる方】

- 家族歴がある方
- 喫煙などリスク因子がある方
- 医師により必要性を指摘されている方

画像検査などと併せて全体的な判断材料として利用されます。

単独で「がんの有無」を確定することはできません。

乳房マンモグラフィー検査

病変の位置や広がりを知るために行う乳房専用のX線検査です。

視診・触診で発見しにくい小さな病変や、超音波検査では発見しにくい微細な石灰化（乳腺の組織内に微細なカルシウムが沈着したもので、乳がんで見られることがあるもの）を見つけることができます。

- 40歳以上は2年に1回を推奨。
- 家族歴や高リスク者は早期受診の検討を推奨（日本乳癌学会）。

乳腺超音波検査（乳腺エコー）

乳房内の病変の有無、しこりの性状や大きさ、わきの下など周囲のリンパ節への転移の有無を調べるために行われる検査です。

若年層や高濃度乳房でも病変を捉えやすく、痛みが少ない、放射線を使わないため被ばくはないといったメリットがあります。

【必要性が考えられる方】

- 40歳未満の方、乳腺が硬い（高濃度乳房）と指摘された方。
- 家族歴やハイリスクの方。

子宮頸がん検診（頸部細胞診）

子宮頸部細胞診は子宮頸部の細胞を採取し、前がん病変やがんを顕微鏡で確認する検査です。

20歳以上の女性に2年に1回の細胞診を推奨(厚生労働省)

前がん病変を早期に発見し治療可能。

検査は比較的簡便で苦痛が少ないが、採取時に軽度の痛みや出血が起こる場合あり。

経腔エコー検査（経腔超音波検査）

腔内に細いプローブを挿入し、子宮や卵巣を近距離から観察できる超音波検査です。痛みや被ばくが少なく、婦人科診療で最も基本的な検査の一つです

子宮筋腫、卵巣嚢腫、子宮内膜症、卵巣がんなど多くの婦人科疾患の早期発見に有用

【必要性が考えられる方】

月経痛、過多月経、不正出血、卵巣疾患疑いがある方

HPV（ヒトパピローマウイルス）検査

HPVは性交渉を介して感染し、多くは自然に排除されますが、一部は持続感染し子宮頸部の細胞に変化を起こし、数年以上かけて子宮頸がんに進展することがあります。

検査は、子宮の入り口（子宮頸部）をブラシで軽くこすり、細胞を少しだけ採って調べます。このとき採った検体を使って、HPVに感染しているかどうかを調べます。

30～60歳で5年に1回のHPV検査を推奨（国立がん研究センター）

骨密度検査

骨密度検査は、骨の強さ（密度）がどれくらいあるかを調べる検査です。

年齢とともに骨は少しずつ弱くなるため、骨折しやすくなる“骨粗しょう症”の早期発見に役立ちます。

もっとも一般的なのは2種類の異なる弱いX線を当て、骨を通り抜ける量の違いから骨の密度（骨量）を測るという方法で、ベッドに横になるだけの簡単な検査です。

【必要性が考えられる方】

- 閉経後の女性
- 家族に骨粗しょう症がいる
- 身長が縮んできた
- 痩せている
- 運動量が少ない

前立腺がん検査

前立腺がんの可能性を早めに見つけるための検査です。男性特有の臓器「前立腺」にできるがんで、早い段階では症状が出にくいいため、検査が役に立ちます。

血液を少量とるだけで、前立腺から出る“PSA”という物質が多くなっていないかを調べます。

PSAは、前立腺がつくるたんぱく質です。加齢や前立腺肥大でも少し上がりますが、がんがあると高くなりやすい特徴があります。

PSAが高くても“がん”とは限らず、追加検査（MRIや生検）が必要になることがあります。

【必要性が考えられる方】

- 50歳以上の男性
- 家族に前立腺がんになった人がいる
- 排尿に時間がかかる、尿が出にくいなど気になる症状がある

胃部内視鏡（経口・経鼻）検査

柔らかく細長いカメラを使って食道・胃・十二指腸の中を直接見る検査です。がん・ポリープ・炎症などを早く見つけることができます。

経口（口から）

- 一般的な方法で、口から内視鏡を入れます。
- カメラがのどを通るときに「オエッ」となりやすい人もいます。

経鼻（鼻から）

- 鼻から細い内視鏡を入れる方法です。
- のどを通らないので「オエッ」となりにくく、会話もできます。
- 鼻血が出ることがありますが、多くはすぐ止まります。

【必要性が考えられる方】

- 胃の不調が続く（胃もたれ、胸やけ、痛みなど）
- 40歳以上で一度も胃カメラを受けたことがない
- 家族に胃がんの人がいる

ピロリ菌検査

ピロリ菌（ヘリコバクター・ピロリ）は、胃の中にすみつく細菌です。長く感染したままだと、胃炎・胃潰瘍・十二指腸潰瘍、そして胃がんの原因になることがあります。

ピロリ菌は症状がないまま長い間すみつくことが多いため、知らないうちに胃の病気が進んでしまうことがあります。早めに見つけて治療すれば、胃の病気を防ぎやすくなります。

尿素呼気試験（息を使う検査）

専用の粉薬を飲んで、息を袋に吹き込むだけ。とても精度が高い検査です。

抗体検査（血液・尿）

血液や尿から「ピロリ菌と戦った形跡」があるかを調べます。

便中抗原検査

便にピロリ菌の成分が含まれているかを調べます。

【必要性が考えられる方】

- 胃の不快感が続く
- 家族に胃がんの人がいる
- 以前に胃潰瘍や十二指腸潰瘍になったことがある
- 40歳以上で一度も調べたことがない

頸動脈エコー検査

首にある太い血管「頸動脈」の状態を、超音波（エコー）で調べる検査です。

動脈硬化の進み具合や、血管が狭くなっていないかを確認できます。痛みはありません。

頸動脈に動脈硬化（血管の老化）があると、脳梗塞のリスクが高くなるため、早めに気づくことが大切です。

検査は、ベッドに横になり、首にゼリーを塗って超音波の機械をあてるだけ。

痛みはなく、10～15分ほどで終わります。

【必要性が考えられる方】

- 血圧が高い
- コレステロールが高い
- 喫煙している
- 糖尿病がある
- 家族に脳梗塞や心臓病の人がいる

心臓エコー検査

超音波（エコー）を使って、心臓の動きや形、血液の流れを調べる検査です。痛みはなく、安全に受けられるため、心臓の“健康チェック”として広く使われています。

心臓の動きがしっかりしているか、心臓の筋肉が厚くなっていないか、弁（血液の逆流を防ぐ“扉”）が正常に開閉しているか、血液がスムーズに流れているか、逆流していないかがわかります。

【必要性が考えられる方】

- 血圧が高い（高血圧が長く続くと心臓に負担がかかるため）
- 動悸、息切れ、むくみがある
- 不整脈がある
- 心雑音を指摘された
- 家族に心臓病の人がいる

胸部 CT 検査

体の周りを回る装置で胸を輪切りのように撮影し、肺・気管・血管・心臓周囲などを詳しく見る検査です。X線をしますが、痛みはありません。

肺がんの早期発見、肺炎・気管支の異常、肺気腫（タバコによるダメージ）、胸のしこり、影の有無がわかります。

【必要性が考えられる方】

- 喫煙歴がある方
- せきが長く続く
- 胸の影を指摘されたことがある
- 家族に肺がんの人がいる

喀痰検査

せきと一緒に出る「たん（痰）」を調べる検査です。

肺や気管支の中に異常がないか、細菌やウイルス、がん細胞などが含まれていないかを確認するために行います。

4. 喀痰（たん）を採取して医療機関に提出し、細菌検査・塗抹検査・遺伝子検査などがおこなわれます。

【必要性が考えられる方】

- 痰が続く、痰に血が混じる
- 長い期間せきが治らない
- 喫煙歴が長い
- 胸のレントゲンや CT で異常を指摘された

大腸内視鏡検査

大腸内視鏡検査は肛門から内視鏡を挿入して大腸全体（直腸～回盲部）を直接観察でき、病変の発見と同時に治療（ポリープ切除）が可能な検査。便潜血陽性者に対する精密検査としてゴールドスタンダードとされる（国立がん研究センター 2024 ガイドライン）。

痛みは少なく、必要に応じて鎮静剤を使うと眠ったような状態で受けられます。

大腸がんは“ポリープ”という小さなできものから始まることが多く、内視鏡ならその場でポリープを取ることができ、将来のがん予防につながります。

【必要性が考えられる方】

- 便潜血検査が陽性だった
- 血便がある、便が細くなった
- お腹の張り、便秘異常が続く
- 家族に大腸がんの人がいる

大塚商会健康保険組合では、50歳、55歳、60歳を迎える被保険者・被扶養者が便潜血(一)陰性かつ自覚症状のない方が自費診療で受診する場合 50,000円まで検診費用を補助する制度があります。

(注)組織検査や治療(ポリープ切除等)を実施した場合は保険診療となり、3割を自己負担でお支払いいただきます。

血清鉄検査

血液の中を流れている「鉄分」の量を調べる検査です。鉄は赤血球の材料となり、体中に酸素を運ぶ大切な働きをしています。

鉄が不足すると、疲れやすさ・だるさ・集中力の低下などの原因になる「鉄欠乏」や「貧血」につながります。

採血だけで調べられる検査です。

【必要性が考えられる方】

- 疲れやすい、息切れしやすい
- 立ちくらみがある
- 月経量が多い
- 妊娠中、授乳中

HCV 抗体検査

HCV 抗体は、「C型肝炎ウイルス (HCV)」に過去または現在感染したことがあるかどうかを採血だけで調べられる検査です。

C型肝炎は自覚症状がほとんどないまま進むことが多く、早めのチェックが大切です。

C型肝炎は肝臓に炎症が続く病気で、長い期間そのままにすると肝硬変や肝がんにつながることがあります。

採取した血液を用いて、HCV 抗体 (C型肝炎ウイルスに対する抗体) があるかを調べます。

【必要性が考えられる方】

- 健康診断で一度もC型肝炎を調べたことがない
- 過去に輸血を受けたことがある (1992年以前)
- 疲れやすい、だるいなど原因が分からない症状が続く

HBs 抗原検査

HBs 抗原は「B型肝炎ウイルス（HBV）」が体の中にいる時に、血液中に出てくるウイルスの“目印”です。

この検査は、現在 B型肝炎に感染している可能性があるかどうかを採血だけで調べられる検査です。

慢性化すると肝硬変や肝がんのリスクが高まるため、早期のウイルス検出が重要とされています。

採取した血液を用いて、HBs 抗原（B型肝炎ウイルスの表面抗原）が含まれているかを調べます。

【必要性が考えられる方】

- 過去に B型肝炎ウイルスの検査を受けたことがない方
- 家族や同居者に B型肝炎の感染者がいる方
- 肝機能（ALT・AST）が高いと言われたことがある方

HBs 抗体検査

HBs 抗体は B型肝炎ウイルスに対する防御抗体であり、免疫の有無を評価する指標として使用されています。

B型肝炎に対する「免疫」があるかどうか分かります。

採血によって血液中の HBs 抗体（B型肝炎ウイルスに対する免疫）の量を調べます。

【必要性が考えられる方】

- 過去に B型肝炎ウイルスの検査を受けたことがない方
- ワクチンを接種したが、免疫がついているか確認したい方
- 家族や同居者に B型肝炎の感染者がいる方
- 過去の感染歴が不明な方